

「わたしは、生きている」

主任司祭 晴佐久昌英

11月は「死者の月」とも呼ばれ、亡くなった方を特別に想うときです。もしも今、あなたが大切な人と死別して悲しんでいるならば、そんなあなたに、「キリストの復活とは亡くなった方の復活でもあり、あなた自身の復活でもある」という福音を語ろうと思います。

大切な人を失った当初は悲しみのあまり何も考えられず、その人がいないという現実感を持たずにいたでしょうし、結局はその後何年たっても喪失感が癒されず、失ったものの大きさを感じ続けているという人もいるでしょう。それは、おかしなことではありません。それほどに愛していたということですし、それほどに死別の苦しみは大きいということです。もう二度と会えない。あの笑顔が見られない。ことあるごとにその事実を思い知らされるのは、つらいことです。しまいには、「この思いが晴れる日は二度とこない」とか、「この先自分だけ生きて行く意味を見出せない」と思う人もいるかもしれません。

しかし、それは違います。その思いが晴れて喜びに満たされる日は必ず来ますし、この先自分だけで生きて行くのではないからです。そのような喜びと、なおも生きる意味をもたらすものこそ、「復活信仰」です。

イエスの弟子たちの中で真っ先に復活体験をしたのは、マグダラのマリアです。娼婦だったと伝えられるマリアは罪深い女と蔑まれていましたが、イエスの語る「神の愛の教え」に感動し、イエスが宣言した「神のゆるしの福音」を受けて新たに生まれ変わりました。そんな彼女にとってイエスは人生のすべてだったに違いありません。そのイエスが突然捕えられ、十字架に釘づけられて、目の前で殺されてしまったのです。それは、どれほど悲痛な体験だったことでしょうか。愛する人の死が信じられず、もはやこの悪夢が晴れる日は来ないという絶望の中、おそらくその夜、マリアは一睡もできずに完全な闇を体験したに違いありません。言うなればその日、彼女もまたイエスと共に死んだのです。

しかし、マリアが朝早くイエスの墓に行ったとき、イエスが現れて呼びかけます。「マリア」と。彼女は振り向き、イエスを見て叫びます。「先生！」それはあまりにも突然の出来事でした。マリアは喜びのあまりイエスにすがりつきますが、イエスは言いました。「すがりつくのはよしなさい。わたしは父のもとへ上るのだから」。

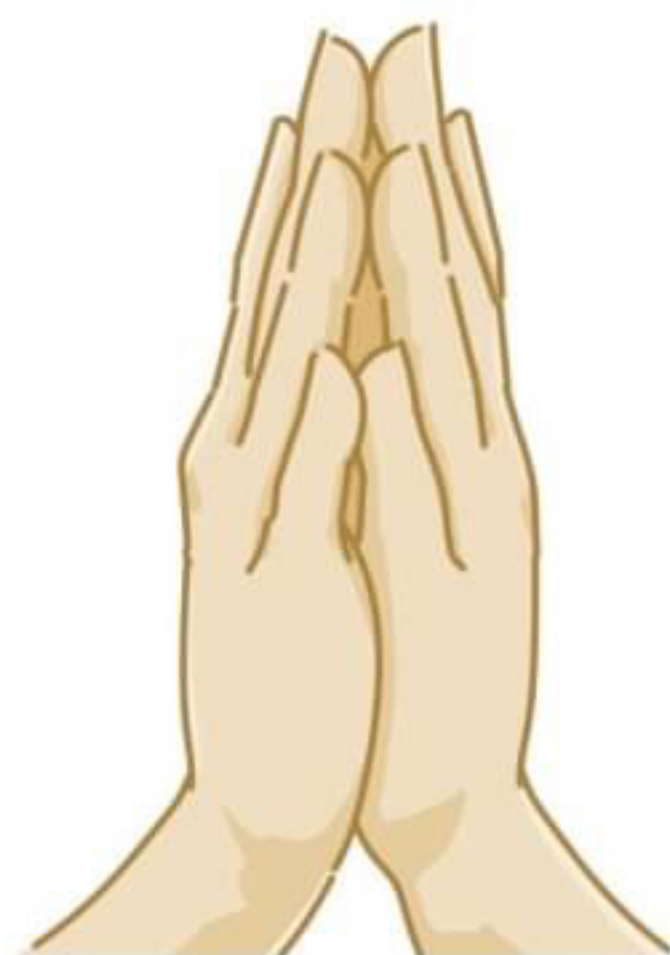
この「父のもと」とは、永遠なる天のことです。すべての人は天の父から生まれた神の子として、この世という準備期間を終えたのち、その父のもとへと生まれていきます。「この世の死」という産道を潜り抜けて生まれていく天こそが本番であり、そこにはこの世以上の喜びが待っています。すべての苦しみは「生みの苦しみ」であり、どんな死でもそれは天の父の愛による誕生です。イエスは、その真実を尽きせぬ愛をもってマリアに現したのです。

マリアはイエスと再び会って、確信しました。「わたしは何も失っていない」「わたしもやがて父のもとに生まれ出て、この世以上に深く主と交わる日が来る」。他の弟子たちも同様に、死んだはずのイエスとの神秘的な出会いを体験してよみがえり、永遠なる天への希望を新たにして、全世界に向けて出発したのでした。「主は復活した！私も復活した！あなたも復活する！」と宣言するために。

わたしもキリストの弟子として宣言します。

あなたは、大切な人を失っていません。あなたの愛する人は、いま、主と共に生きています。「不幸なことに死んでしまった」のではなく、「幸いな天に生まれ出て、あなたの幸せのために働き、あなたとの再会の日を待ち望んでいる」のです。むしろ不幸なのは、それを知らずに苦しみや恐れに囚われている、この世のわたしたちでしょう。そのような真理を知って信じたとき、あなたも復活します。この特別な11月にこそ、主キリストと共に宣言する天上の彼らの声を聞いてください。

「わたしは、生きている」という声を。



イラストACより